「それ見いな。中々飲み口が良えで、さア續いても一つ。」
「阿呆らしい、そない饗ばれたら醉ひつぶれます。」
「醉ひんかいナ。誰に遠慮は有れへんがナ。皆も左様や。今日は無禮講やで、お清もお元も、燗番は又交代でやる様にして一緒に坐つてやつたら良え。さ、お清一杯往こか。」
「滅相な、妾し等女の事でお酒なんて飲んだ事おまへん。」
「無かつたら飲んで見んかいナ。おい誰ぞ酌いだり〳〵。さア、皆盃をドン〳〵廻しや。」
さア初めの内は皆遠慮をしてますが、だんだん廻つて來ると陽氣になります。薄暗いと陰氣でいかん。燭臺竝べて燈を灯せ。豪い騷ぎでおます。
北陽では菊江さん。若旦那からの急のお使ひ。持て來た手紙を見ると此迎ひに隨いて直ぐ來て呉れ着物も何も其儘で良え依て早う來る様との文面でムります。見覺えのある若旦那の筆蹟でもあり、兎に角早々參りませうと云ふので平常着の白地の帷子、薄色の單帶といふ手輕な風で近所の駕に乘りまして、使ひの藤七を案内にして蜆橋を南へ、大江橋から淀屋橋を渡りまして、浮世小路を東へ這入ると提燈の火を消してやつて參ります。
「駕丁はん、此の家だすね。この入口から駕入れとくなはれ。飛び石になつてる依て足元氣イ附けとくなはれや。」

「ヘエ、宜しおます。さ、相棒、ジツクリ來いよ。」
前栽の出入口から駕を入れまして緣先の廊下へ降ろしました。
「あゝ駕丁はん御苦勞はんだした。そんなら貴女はん御案内致しまつさ。」
廊下傳ひに、奥座敷、佛間を通り越して中の間へ來て見ると若旦那が正面に坐つて、番頭から若い者、丁稚女中に至るまでズラツと竝んで酒盛の眞最中。
「ヘエ、お連れ申しました。」
「まア若旦那。」
「おゝ菊江、來て呉れたか待つてたんや甚い早かつたなア。急に呼びに遣つて吃驚したやろ。」
「何が何やら譯が解らしまへんねがナ。せめて髮位梳き附けてと思ふてるのに、お使ひのお方が豪ふ慌いてや物やさかい。まアこんな風態で、妾恥しいわ。」
「何云ふてんね。氣の張るお客さんは一人もあれへん。此處に居るのは内の店の者ばつかりや。……」
「まア、勝手な事ばつかり喋つて誰方はんも御免やすや、御挨拶もしまへんと……。」
「オイ〳〵、そんな堅苦しい挨拶も何も入らへん、此處に居るのん、これが番頭や。今晩斯うして逢えたんも、皆此粹な番頭の計らひや、あんじように禮云ふといてや。」
「まアこれは、御番頭はんでムりますか、初めましてお目に掛ます。毎度御迷惑をお掛け申しまして